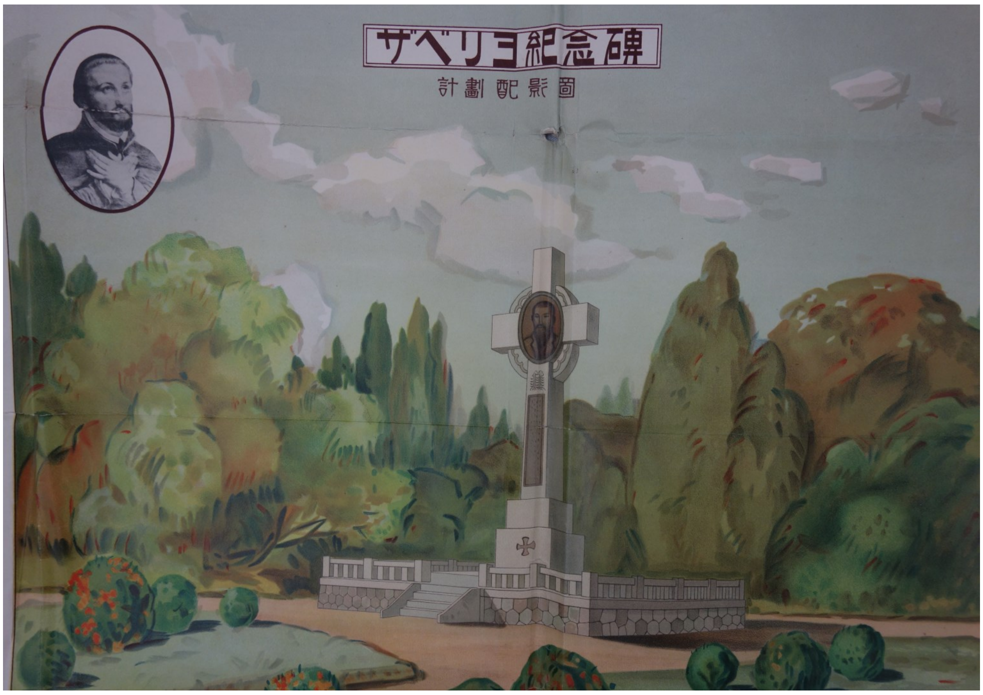
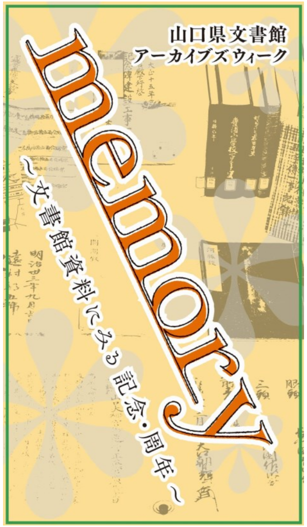

ザベリヨ紀念碑
計劃配影圖

ザベリヨ紀念碑　計画配影図（「天主教ザベリヨ記念碑一件」滝口明城文庫167）


山口県文書館
アーカイブズウィーク
memory
～文書館資料にみる記念・周年～

✻16

これから ❸

記念碑でかたりつぐ

《記念碑のある場所》

陸軍歩兵第四十二聯隊の衛戍地(現陸上自衛隊山口駐屯地)に近接したサビエル記念公園(山口市金古曽)。16世紀なかば、大内義隆からキリスト教布教を許されたサビエル(Xavier、大正期の記録等では「ザベリヨ」とされる)が布教拠点とした大道寺があったとされる場所です。故地は正確には旧衛戍地内と推測されていますが、サビエルの記憶をとどめる装置として大正15年(1926)、高さ5メートルの巨大なゴシック様式の記念碑が建立されました。

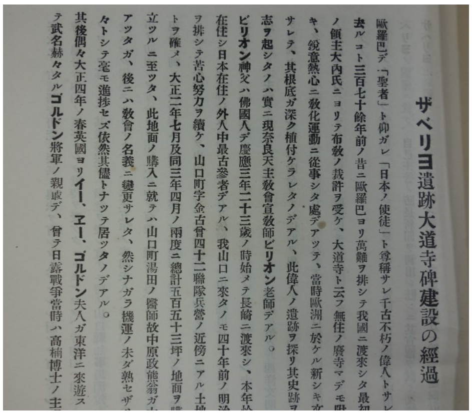
《由緒をさだめる》

大道寺の跡地を探し当てたのは、日本国内のキリスト教にまつわる古蹟を調べていたビリオン(Villion)神父でした。明治22年(1889)、山口教会への着任後、ビリオンは安部家旧蔵の「山口古図」を根拠に、郷土史家近藤清石の協力の下にその場所を特定したとされます。この地の購入を最初に手がけたのは敬虔な信者でもあった山口町湯田の医師中原政熊(中原中也養祖父)でした。

《顕彰事業の展開》

ビリオンは、大道寺跡の由緒を語り継ぐために、当時の原保太郎知事に顕彰事業への支援をはたらきかけたとされます。

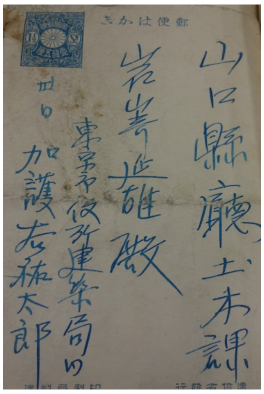
大正期になると、寺内正毅が馬淵鋭太郎知事に大道寺跡顕彰の必要性を勧奨したのを契機に、この事業は一気に県レベルの文化プロジェクトとして意識されることになります。中央政界からも、原敬・後藤新平・西園寺公望らが賛意を示します。



ザベリヨ遺跡大道寺碑建設の經過

歐羅巴デ「聖者」ト仰ガレ「日本ノ使徒」ト尊稱サレ千古不朽ノ偉人トサレ
去ルコト三百七十餘年前ノ昔ニ歐羅巴ヨリ萬難ヲ排シテ我國ニ渡來シタ最初
ノ領主大内氏ニヨリテ布敎ノ裁許ヲ受ケ、大道寺ト云フ無住ノ廢寺マデモ附
キ、鋭意熱心ニ敎化運動ニ從事シタ處デアツテ、當時歐洲ニ於ケル新シキ文
サレテ、其根底ガ深ク植付ケラレタノデアル、此偉人ノ遺跡ヲ探リ其史跡ヲ
志ヲ起シタノハ實ニ現奈良天主敎會宣敎師ビリオン老師デアル。
ビリオン神父ハ佛國人デ慶應三年二十三歳ノ時始メテ長崎ニ渡來シ、本年於
在住シ日本在住ノ外人中最古參者デアル、我山口ニ來タノモ四十年前ノ明治
ヲ排シテ苦心努力ヲ續ケ、山口町字金古曾四十二聯隊兵營ノ近傍ニアル土地
トヲ確メ、大正二年七月及同三年四月ノ兩度ニ總計五百五十三坪ノ地面ヲ購
立ツルニ至ツタ、此地面ノ購入ニ就テハ山口町湯田ノ醫師故中原政熊翁ガ
アツタガ、後ニハ敎會ノ名義ニ變更サレタ、然シナガラ機運ノ未ダ熟セザ
々トシテ毫モ進捗セズ依然其儘トナツテ居ツタノデアル。
其後偶々大正四年ノ春英國ヨリイー、ヱー、ゴルドン夫人ガ東洋ニ來遊ス
テ武名赫々タルゴルドン將軍ノ親戚デ、曾テ日露戰爭當時ハ高楠博士ノ主

▲ザベリヨ遺跡大道寺碑建設の経緯
（一般郷土史料B478）



郵便はかき

山口縣廳土木課
岩嵜延雄殿

東京市役所建築局
加護谷祐太郎

記念碑設計者加護谷祐太郎からの葉書

(県庁戦前B建築課3010)

工事記録（県庁戦前B建築課3010）をひもとくと、レリーフ鋳造の遅延に関する彫刻家吉田三郎からの弁明の書翰や、「工事急グ何時来ルカ」石工済本義之助に宛てた催促の電報案が目にとまります。記念碑工事竣工までの差し迫った状況が目に浮かびます。

一方で、ビリオンは、山口におけるキリスト教布教のことはじめにまつわる事蹟を「西洋文明の東漸」の象徴として価値付け、実業界に向けて支援を懇願します。寄附呼びかけにあたって「建設趣意書」「ザベリヨ略歴」とともに作製されたのが、前頁で紹介した「記念碑完成予想図」です。その結果、三井・三菱・渋沢等からの支援を取り付けることに成功します。この顕彰事業に、資金面で最も手厚い支援の手をさしのべたのが、山口出身でビリオンの旧知にあたる鮎川義介(戸畑鋳物会社社長)でした。鮎川義介の父親は防長新聞の創刊にかかわった鮎川喜八です。この関係から、顕彰事業に加わったのが、大正6年以降、防長新聞社副社長兼主筆として紙面刷新と販路拡大の任に当たっていた原田豊次郎(紀堂)でした。原田は防長新聞でザベリヨ関連事蹟の顕彰や称揚を繰り広げ、事業の意義をPRしていきます。

こうして、ビリオンの活動を支援するかたちで、県知事・内務部長・吉敷郡長・山口町長ほか地元実業界から八木宗十郎も加わり、大正10年4月にザベリヨ遺跡保存会が発足します。保存会の席上で顕彰事業の必要性や意義を重ねて熱く訴えたのが鮎川義介と原田豊次郎でした。

《記念碑の設計と工事進捗》

大正11年6月に開催された第二回保存会協議会で知事を保存会代表とすること、寄附金で記念碑を建設すること、公園整備を含む建碑工事全般を県内務部土木課の管轄とすること(主担当は建築技手岩崎延雄)、記念碑の設計を東京市建築技師加護谷祐太郎に委嘱すること、県高等官建築技師新井英次郎が工事全般を指揮することが決められました。

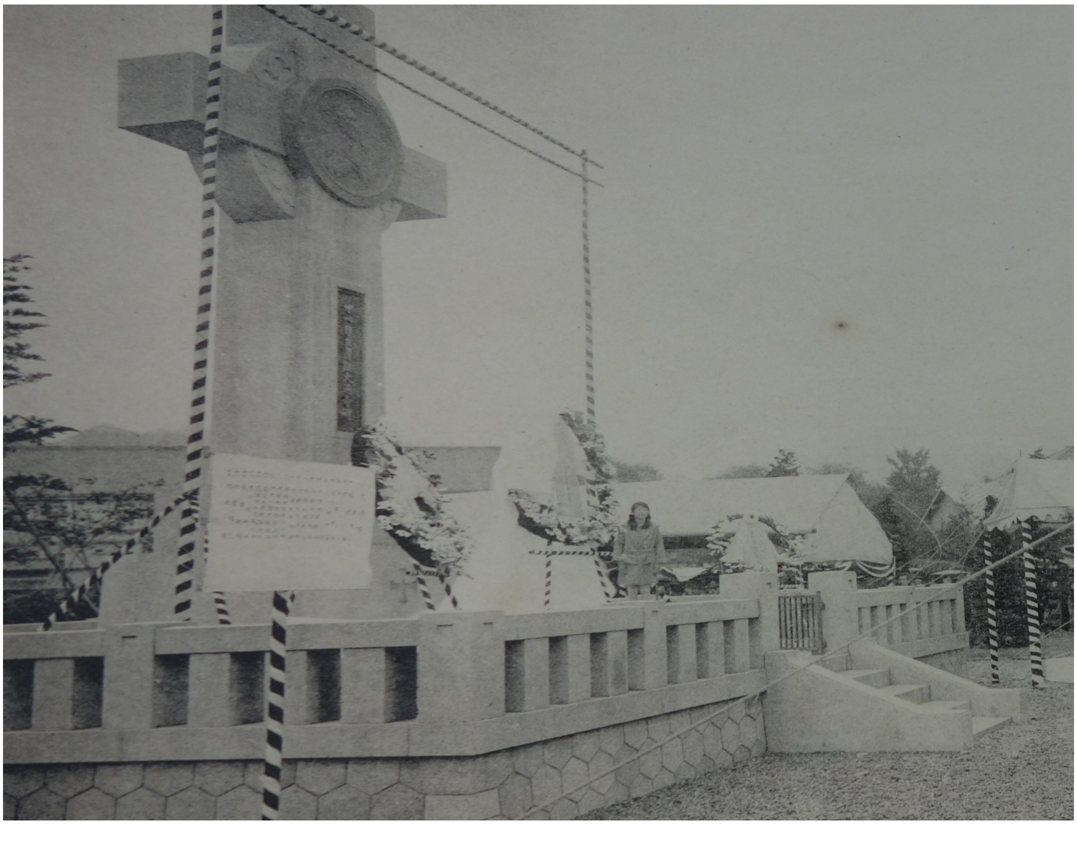
大正12年3月、加護谷技師による記念碑デザイン案が完成、明和元年(1764)創業、大阪天満の老舗石匠平清(ひらせい)(担当は石工済本義之助)により、北木島(現岡山県笠岡市)産花崗岩を用いて碑が造られました。

大正13年11月の地鎮祭を経て、記念碑組立やサビエルの肖像(彫刻家吉田三郎の手になる銅製レリーフ)のはめ込みが完了したのは翌年六月でした。さらに、山口の庭師赤井弥一郎による植栽整備を終えた大正15年10月16日、記念碑の除幕式が挙行されました。

《盛大な除幕式》

式典には、若槻礼次郎首相、幣原喜重郎外相、浜口雄幸内相など政府要人からの祝電が寄せられました。スペインやローマ法王からの使節の来臨があり、「国際親善の盛典」として賞賛されました。式後には、言語学界の権威であり、南蛮交流史研究の第一人者であった新村出(元山口県令関口隆吉次男)の記念講演が予定されていました(実際には病欠)。ほかにも、菜香亭では特別晩餐会が開かれたほか、防長新聞社の後援で、「吉利支丹関係遺物展覧会」「建碑記念大音楽会」も挙行され、町全体が祝賀ムードに満ちあふれました。

こうして、山口でのキリスト教伝道のあれこれが記憶に刻み込まれることになったのです。



◀記念碑除幕式
(一般郷土史料
B478)